# Dialogue

Creating the Next 60 Years

# 『記念事業実施報告書』

2014年7月14日-17 日

「対話」を続ける、「対話」を支える：
福島県新地町訪問、およびICU祭展示について
—2014年度 ACTによる60周年記念事業報告—

ICU 60th Year

献学60周年記念事業
国際基督教大学

1．概要

東日本大震災から3年以上が経った今、大学教育における「対話」の重要性はますます増している。被災地の人々と、東京の学生との対話。学生と、震災を忘れつつある周囲の人々との対話。異なる学問分野間の対話。教員と学生の対話。以下は、これらすべての「対話」を試みた活動の報告である。

2014年7月14～17日、教員2と学生4名が福島県新地町を訪れ、震災から3年後の被災地の現状をフィールドワークした。またその調査結果を同年10月25、26日のICU祭にて展示報告し、現地支援のための手芸品も販売した。引率教員・加藤恵津子と、オブザーバー参加の教員・村上むつ子はACT（Actions of Concerned Teachers）のメンバーである。また学生4名は、公認サークルLearn to Change（2011年度発足時の名称はGanbarou Tohoku and Japan、翌2012年にメンバーを刷新してICU for 311と改名、後に現在の名称に再改名）のメンバーである。

同サークルは2012年に新地町で初のフィールドワークを行い、その年のICU祭にて展示報告と手芸品販売（根津真知子教授が関わる宮城県支援の手芸品販売活動Yearn Aliveとコラボレーション）を行った。2013年のICU祭でも、各メンバーの活動紹介と手芸品販売（人類学調査実習組による岩手県についての展示とコラボレーション）を行っている。

2014年度の新地町の再訪は、2年前の調査結果との比較考察を学習の目的としている。またこの訪問にあたり、新入生リトリートや学内で新たな参加者も公募した（応募者なし）。

1．福島県新地町における「対話的」フィールドワーク

■期間：2014年7月14日（月）～17日（木）、3泊4日

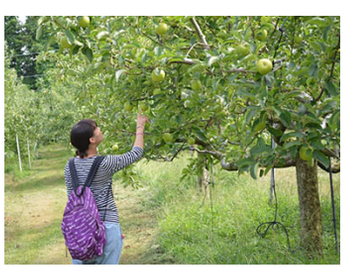
■参　加　者：加藤恵津子（引率、人類学教員）、村上むつ子（サービスラーニング非常勤講師、ジャーナリスト）、能田昴（4年生、教育学）、内山真菜美（4年生、文学）、小林真奈（4年生、言語学）、栗栖由喜（3年生、メディア・文化・コミュニケーション）

■現地概況：
- 福島県相馬郡新地町（仙台駅よりレンタカーで1時間30分程度。福島最北端、宮城との県境の、太平洋沿岸の町。人口約8,000人）。福島第一原発から北へ50Km。地震、津波、微量の放射線、風評被害、メディアからの無関心など五重の「被災」を経験。
- 農業はほぼ復興しているが、地元の学校給食にも地元産の野菜は使わないなど、子供のいる地元民の警戒も強い。
- 漁業は「自粛」期を経て試験操業中。放射線が検出されなければ廉価で出荷。
- 南相馬市などからの避難者も多い。
- 仮設住宅から新設の住宅へ、被災者の引っ越しが進行中。

■フィールドワーク内容：

1日目には昼ごろより新地小学校を訪れ、校内を見学後、震災後の子供たちの様子について教頭先生より伺った。校内には、震災後に企業からの支援を受けて設置したソーラー発電システムがあるなど、物質的には一見恵まれていたが、子供たちの精神面のケアは容易ではなかったことなどを伺った。晩には小川仮設住宅にて、漁師の方々が自ら料理して下さった魚介類を、仮設住宅の皆さんと語り合いながら集会室でいただき、そのまま宿泊した。

2日目午前中には、2年前にも訪れたリンゴ園を訪れ、その後の変化について農園主に聞き取りを行った。売り上げはかなり回復したとはいえ、震災前ほどではないこと、一度離れた首都圏の客は戻ってこないことなどを伺った。昼には仮設住宅にて、津波で流された旅館の元女将でもある、昔話と震災の「語り部」に、三人の漁師の実体験をもとに創作された震災紙芝居を披露していただき、お話も伺った。午後には漁協の支部長に、いまだ再建中の相馬双葉漁港を案内していただき、放射線モニタリングの施設を、担当者の解説付きで見学した。販売可能な魚種は増えているものの、審査が厳しく長いこと、またインフラそのものが回復していないことから、震災前の状態とはほど遠いことを伺った。

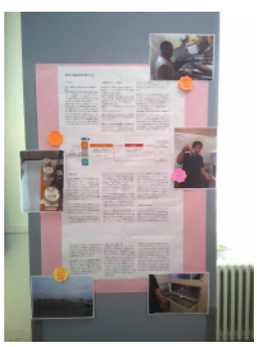


3日目午前中には、地場産農産物の市場「あぐりや」、隣接する魚屋「かね幸（こう）水産」を訪れ、それぞれの店主より2年前からの変化を伺った。「あぐりや」は、南相馬などからの避難者流入により売り上げは戻ったが、「かね幸水産」は事実上いまだ休業状態であった。続いて米農家を訪れインタビューすると、売り上げは徐々に上がっているが、2年前よりも明確に原発反対の立場を取るようになったことを伺った。午後には新地町役場の復興担当職員に、町内に点在する建設中の復興住宅群や、被災した多くの墓石を集めて作った鎮魂の碑を擁する寺などをご案内いただいた。3時には現地を出発、東京への帰途に就いた。

2．ICU 祭における「対話的」展示

以上のフィールドワークの結果を、10月25日（土）、26日（日）の2日間にわたり ICU 祭で展示報告した。学生は「町役場と小学校」「仮設住宅」「漁業」「農業」のテーマに分かれて展示物を執筆、掲示した。学生は来場者との対話型のコミュニケーションを心がけ、ま

た会場の数か所にポストイットとペンを置き、 来場者が自由にコメントを書いて展示物に貼れるようにしたり、 ゆっくり話をしたり考えたりしていただけるようテーブルと椅子を設けて、 資料（震災関連の本や現地新聞）、 新地町特産の「にらかりんとう」 等の菓子、 飲み物を置いたりした。
さらに2012年より3年連続で、 小川仮設住宅の高齢女性たちが作った毛糸の手芸品を販売した。 手芸品は、 子供たちにも興味を持ってもらえるよう「釣りゲーム」 の形でも販売した。
来場者からは、 真摯なコメントや感謝の言葉が多数寄せられた。 特に幼い子供のいる人々、 被災地にゆかりのある人々（出身者やボランティア経験者）からは、震災の風化を危惧する声や、現地の声を、 2 年の時を経て直接届けようとする学生たちへの激励の言葉を戴いた。



3.　付記：海外との「対話」を求めて
　新地町訪問にオブザーバー参加した村上むつ子氏は、 今回の調査に基づく記事を、 マレーシアの主要英字新聞 New Straits Times の 2014 年 8 月 6 日オンライン版に掲載した：
http://www.nst.com.my/node/21698

【文責：加藤恵津子】

学生による報書

http://subsite.icu.ac.jp/anniv60/en/events/2014/0714students_report.pdf